

「感染症対策と原発事故時の避難の両立は、困難だとは思っている」

「老朽原発の再稼働には引き続き反対」

「高浜3号の異物は必ず見つけるよう、関電に会うたびに伝えている」

「避難計画を案ずる関西連絡会」は9月1日、感染症対策と原発事故時の避難、老朽原発再稼働等に関し、滋賀県へ申し入れしました。市民は滋賀から2名、大阪から4名が参加。原子力防災室の参事と主任の2名が対応。質問・要望書^{*}を提出し、約40分やりとりしました。



◆「密は解消できない」「今の避難所の数だけでは当然足りない」

市民は、8月27日の福井県防災訓練の実態を紹介する等して、感染症対策と原発事故避難は両立しないことを具体的に示しました。県も訓練を視察したとのことでした。

やり取りの中で県は、当然密になってしまい、両立は困難だとは思っていると述べました。避難には多くの課題があるとし、県は以下の点等を挙げました。

▽避難バス：特に美浜原発事故では5万人以上が避難対象になるため、確保は大きな課題。▽汚染検査場所：国は「分散検査」するように示しているが、人員の問題もあり、「分散検査」はできない。高島市と長浜市各1ヶ所。しかし、感染症蔓延時にそれに対応できるのか検討していかねばならない。▽避難所：密を避けるためには、現在の数だけでは当然足りない。災害協定を締結しているホテルや、指定避難所以外の避難所等、これら全てを避難所として開設しなければ収容し切れない。しかし、具体的計画はできていない。▽検温：避難者が大勢いる場合は、避難を優先させるためにできないだろう。

◆「寿命40年とすべき。あえて動かす理由は見当たらない」

老朽原発の再稼働に対して「容認できないと繰り返し関電に伝えている」「県原子力安全対策連絡協議会で関電、規制庁に説明を求める」と回答。また、「法律で原則40年と定められている。エネルギーは逼迫しておらず、あえて動かす理由は見当たらない。再稼働しても十数年で廃炉となるため、やはり別の方向に進むべき」との考えを示しました。しかし、事前了解の権限を含む安全協定の改定等はなかなか進んでいないとのことで、今後の課題です。

◆「高浜3号細管損傷の原因は必ず突き止めるべき」「『異物』が海に流れたとは考えにくい」

高浜3号蒸気発生器細管損傷事故について、「異物」不明のまま高浜4号を稼働させたことを問題視し、「『異物』は必ず見つけるよう、関電に会うたびに求めている」と回答。関電が「異物」が海に流れた可能性に触れていることに対し、「海に流れたとは考えにくい」と明確に述べました。

また、双葉郡消防士の活動を綴った「孤塁」を読んだ参加者からの提起を受け、消防署への安定ヨウ素剤の備蓄を検討していきたいと答えました。

最後に、美浜3号の老朽原発再稼働を止めるため、具体的に知恵を絞ってほしいと訴えました。

2020.9.4 避難計画を案ずる関西連絡会